

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	前田 夢子
論文題目	セネガルのグラフィティに関する民族誌的研究 ―壁におどる若者の声と表現―		
（論文内容の要旨） 本論文は、セネガル共和国都市部、とくに首都ダカールにおいて壁面にかかれる（以下、書く・描く・掻くを「かく」と記す）グラフィティ（graffiti）と、その実践者であるグラフィアー（graffeur/e）に着目し、セネガルにおいてグラフィティがいかなる実践であるのかを総合的に明らかにすることを目的とする。グラフィティとは、1970年代のニューヨークで生じた都市下位文化（サブカルチャー）である。壁や公共物に自らの名前を拡散的にかき記すこの行為は、多くの国で罰則対象とされてきた。一方、セネガルでは独立以降グラフィティが禁止されておらず、ダカールのいたるところにグラフィティがかかっている。 序章では、セネガル独立以降の文化政策とグラフィティの受容の歴史を整理した。同国における壁への彩色は、サンゴール政権下で推進された国家的美術制度を基盤とし、1980年代末の市民運動「セト・セタル」による壁画制作へとつながっていく。この運動の中で、都市の美化や啓蒙を目的とした壁画が市民によって描かれ、壁は誰もが利用可能なキャンバスとして認識されていく。そして、同時期に輸入されたヒップホップ文化や、1990年代以降の国内のアートシーンの発展とともに、セネガルにおけるグラフィティは、独自の文脈を確立していった。 続く第1章では、グラフィティが制作される場所と内容を分析した。グラフィアーは無秩序にグラフィティをかいているのではなく、壁が置かれた場所に社会的意味を読み取り、可視性、公共性、利便性といった観点から戦略的に制作場所や描くモチーフを選定していることを明らかにした。 第2章では、グラフィアーたちの現金獲得手段、仕事の受注方法を明らかにし、グラフィティが芸術実践であると同時に、生計を立てる労働としても成立していることを論じた。グラフィアーが形成するクルーは、生計を支え合い、大規模なグラフィティ制作を可能にするネットワークとして機能している。また、クルーによっては理念や経済、人間関係をめぐる複雑な力学が存在することを明らかにした。 第3章では、世代ごとの技術習得過程を検討し、グラフィティに対する社会的認知の変化を明らかにした。第1世代は海外メディアの模倣を通じて技術を獲得したのに対し、第2、第3世代では国内で緩やかな徒弟関係が形成され、第4世代ではSNSやグラフィティ教室を通じた体系的学習が主流となっている。同国においてグラフィティは、家族を中心とした周囲の人々による批判の対象から、金銭を支払って学ぶ技術へ			

と社会的位置づけが変化していることが示された。

第4章では、グラファーがどのようにグラフィティ制作を行っているのかを描写した。グラフィティをかくことは、グラファーにとって仲間と時間を共有し、出来事を記憶する行為であると同時に、地域住民との対話を生む空間でもあった。それは時として身体的痛みや危険を伴い、特に過酷な商業グラフィティ制作の現場では、仲間同士のコーピングや、画材の窃盗といったささやかな抵抗が、実践継続の重要な資源となっていた。

第5章では、グラファーが直面する障壁と、それでも活動をやめない理由を、彼らの語りから分析した。グラファーは、経済的な不安定さや家族の無理解に悩まされている一方で、自己表現欲求や経済的動機などを理由に活動を継続している。グラファーは、グラフィティをかく内的欲求を「**Sensibilisation**（意識向上）」という理念により意味づけていた。この言葉は、グラファーたちが自らの活動を公衆衛生や教育など社会課題への意識を高める「社会貢献」と位置づけ、自らの活動に社会的価値を付与し、外部からの承認や経済的支援を獲得するための戦略的言説でもあると考察した。

以上を踏まえ、終章では、セネガルのグラフィティ実践を総合的に議論した。それは、グローバルなヒップホップ文化の流用とローカルな社会的文脈が結びついた実践であると同時に、セネガルで生きる人々の声を代弁し、啓蒙、生計手段、コミュニケーションの場としても発展しつつある独自の芸術実践であった。グラファーたちはストリートから美術制度内まで主体的に選択し、その混交的な活動のすべてを「アート」として認識していた。セネガルのグラフィティとは、グラファーたちが、アートワールドにより評価されてきた「アフリカのアート」なるものを現地社会との関係の中で再編し、表現の価値や意味を生活の場から問い直し続ける実践なのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、セネガル都市部、とりわけダカールにおけるグラフィティと、その実践者であるグラファーを対象に、アート・仕事・遊びという複数の位相を横断しながら、その社会的意味をグラファーの視点から克明に描いている。欧米の下位文化として発展したグラフィティを、セネガル固有の歴史的・社会的文脈に位置づけ検討している点に、本論文の特徴がある。また著者は、グラファー集団（クルー）の一員としてグラフィティを制作するという調査方法をとった。その徹底した参与観察が、本論文を出色の民族誌として成立させている。

本論文の貢献は、大きく以下の3点にまとめられる。

第一に、本論文は、ダカールという大都市に生きる若者たちを描いた秀逸な群像劇として成功している点である。グラファーたちは日々グラフィティを描くことで、自立したアーティストになろうと努力している。しかし現実には、生計を立てるために企業や個人からの仕事を請け負い、その要望に応じた制作を行わなければならない。それでも彼らはときに仲間と、ときに一人で、描いた瞬間から劣化が始まることを承知の上で、より良い作品を壁に刻もうとする。著者は、そのような理想と現実、達成感と葛藤のあいだで揺れ動くグラファーたちに寄り添い、彼らがグラフィティを描き続ける情熱とそれを支える思想を、臨場感をもって描き出している。

第二に、グラフィティを表象分析にとどめず、内側から技術論として描き出した点である。グラフィティは巨大な壁に制作されるため、キャンバス上の絵画とは異なる身体感覚や技術が要求される。著者は、基礎的な技法から高度な制作技術に至るまで、その習得過程を詳細に明らかにした。たとえば、スマートフォンなどの小さな画面を参照しながら壁に構図を写し取る方法やスプレーの扱い方など、実践を通じて初めて理解可能な微細な技術が具体的に書き込まれている。また、セネガルのグラファーが海外からの技法をいかに学び取り、変容させ、自らの表現として定着させてきたのか、世代間比較を通じて明らかにしている。これにより、セネガルのグラフィティが単なる模倣ではなく、ローカルな実践として再構成されてきたことを実証している。

第三に、ダカールという都市空間において、グラフィティが果たすコミュニケーション機能を具体的に捉えた点である。グラフィティは、ときに企業広告であり、グラファー自身が住民に向けた「Sensibilisation（意識向上）」の手段であり、政治的意見の表明にもなる。博物館や美術館ではなく、日常生活に埋め込まれた壁に高度な絵が描かれることで、そのグラフィティが放つメッセージが人々に影響を与える。制作現場では、グラファーと地域住民とのあいだに会話や交流が生まれ、制作行為そのものが社会的接触の契機となっている。またそれは一方向に限らず、上書きや削除などを通して、住民側からもグラフィティの内容に影響を与える。このようにグラフィティが双方向の

メディアであることが、事例から説得的に論じられている。大都市におけるストリートアートの社会的作用を実証した研究は稀であり、本論文の重要な学術的貢献である。

このように本論文は、ダカールのグラフィティの実践を精緻に描き出すことに成功し、現代アフリカの都市文化研究に新たな視座を提供したと高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2026年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。